

(3) ミュージアム・ショップ

ミュージアム・ショップ、現在そこには数多くの絵はがき、名画の複製、カタログ、屏風のミニアチュアなどが並べられ、売られております。絵はがきは年賀状、クリスマスカード、その他いろいろな記念カードに利用され、名画の複製は気のきいた贈り物として、カタログは鑑賞の記念品として、屏風のミニアチュアは外国旅行のおみやげ品として利用され、仲々の人気です。

将来はその他に、「名品の模造」「写真」「カラースライド」「カセットビデオテープ」「カーデザイン用ステッカー」、そして多彩な「アクセサリー」なども商品として並べ、皆様にご愛用していただきたいと考えております。名品の模造はお部屋の装飾品、写真は大事な研究資料、カラースライドはあなたご自身の美術館、カセットビデオテープは豪華なホームアートシアター、カーデザイン用ステッカーは美しい優先駐車証、アクセサリー類(古代オリエントや中国六朝時代の金細工などをモチーフにした)は、おしゃれなあなたのお気に入り、そんな風に利用され、〈この天平時代のガラス玉を指輪にしたい〉〈そのエジプトのトンボ玉をイヤリングにしたい〉〈あの勾玉をブローチにしたい〉こんなあなたの服飾計画にもお手伝い出来る、そんな楽しいショップに衣がえをしたいと、私達は考えております。

(4) インフォメーション・デスク

美術鑑賞、美術研究、その利用など、美術に関するあらゆるご相談を受け、適切な情報や資料を提供する〈コンサルタント〉のいるデスクです。展示品、休日の美術鑑賞のスケジュール、名所旧蹟や美術館などへの道順と時間、絵はがき、写真、参考書、複製、その他、休憩や食事なども、皆様が何でも気軽におたずね下さる、そんな「情報の窓口」を設け、また「テレフォン・サービス」もより徹底して行いたいと、私達は考えております。

60年代に一番多かった質問—それは、「トイレはどこかしら?」でございました。私たちはその表示の不完全さを反省いたしております。



(5) 実験工房

■手づくりの味

現代はマスプロの時代です。個人に選択の自由はありますが、創造を楽しむ余裕はあまりありません。これまで、見るだけの〈やきもの〉を自分でロクロをひき、土をひねり、絵付けをする。炎が思いがけない自然の美しさをもたらしてあなたを喜ばすことでしょうか。その他、油絵、日本画、水彩画、版画、彫刻、染織など、専門家に親しく指導を受けて、自分みずからの心と手で作るその喜びは、物質に生命を与え、血を通わせることであり、それは生きる喜びに通じるものです。その〈意義ある創造〉を知った今日のあなたは、知らなかった昨日のあなたとはまったく違った目で、新しい鑑賞を経験出来ることでしょうか。私達は将来、皆様方のための〈創作の場〉をもちたいと考えております。

■映像

光と影のおりなす「映像」が、芸術や技術に、はかり知れぬほどの効果を秘めていることは、「映像文化の時代」といわれる今日では常識とされています。それを反映してか、大阪万国博は前回のモントリオール万国博に増して、映像の氾濫でした。こと映像に関しては、「スチール」、「ムーヴィー」とも、すべての試みがなされたといってもよいでしょう。しかし、その結果は期待に反して、効果の少い、空しい印象をあとに残したようです。それは、映像を一度にあまりに多く、いやおうなしに、しかもあまりに「音」に頼り過ぎて、見せられたせいかも知れません。

大和文華館は以前から「映像」に関心をもち、その第1の試みとして、3年前に「日曜映画会」を企画して、現在までさまざまな映画作品を紹介し続けております。第2の試みとして、この12月にスクリーンを本格的なワイドスクリーンに改造して、より優れた映画鑑賞の場を皆様に提供できる予定です。私達はこの映画会を単に正統的な作品公開の場にとどまらせて満足してはおりません。将来は前衛的な作品制作に協力し、それを発表し、そして自らも制作に携わるなど、〈20世紀芸術の末子—映像〉を大切に育てて、視覚の新しい美的体験へと成長させたいと考えております。

(6) 古典の自然園〈文華苑〉

春の大和文華館の池辺には燕子花が一面に咲き、訪れた人々は光琳の有名な燕子花の屏風を思い浮べることでしょう。また秋になると坂道に咲き乱れる薄と萩をみながら、蒔絵の意匠や琳派の屏風を思いおこして歩を運ぶこともあるでしょう。

当館の約3万平方メートルの敷地は、バルコニーの後方に展開する菅原池周辺を借景とした松林で、美しい自然を保っています。この環境を〈文華苑〉と名づけ、野趣横溢した自然庭園として、なるべく人工を加えない、花卉草木そして野鳥や虫の楽園〈サンクチュアリー〉とすることが願いです。そしてその一隅に「古典の自然園」を設け、私たち人間の情操を育ててきた自然美の典型というべきものを実際に育ててみたいと思います。例えば池の畔りには「秋の七草」を、プラザの一隅には「アカンサス」(これはギリシア建築の柱頭装飾となり、クラシックの模様として後世に受けつがれています)を植えることなどです。

私達はおのずと人生における美を愛する心が、かたわらの泉のようにわき出るような、そんな華の園を創りたいと考えております。

皆様方のご意見、ご希望をおまちいたしております。

季刊 美のたより No.15

昭和45年11月1日

発行 大和文華館